

Language Contacts between Austronesian and Papuan in New Guinea : Viewed from Word Order Change

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004368

オーストロネシア語族とパプア諸語の言語接触

——とくに語順変化について——

崎 山 理*

Language Contacts between Austronesian and Papuan in New Guinea

——Viewed from Word Order Change——

Osamu SAKIYAMA

There are two groups of Austronesian languages in New Guinea: AN₁ with S-V-O and AN₂ with S-O-V, according to A. Capell, who attributes the latter to Papuan (or Non-Austronesian) influence. But in each verb phrase in itself different structures are observed in Austronesian and Papuan languages, basically the former with sVo and the latter with types other than sVo.

I classified several types in Papuan languages such as 1. Vs, 2-1. Vso, 2-2. Vsb, 3. Vos, 4. Vbs, 5-1. oVs, 5-2. bVs, 6-1. sV, 6-2. soV, 6-3. sVb. Most belong to 5-1 and 5-2. The verb phrase composed of such affixes as s, o and b, which mean subjective, objective and benefactive, respectively, functions as a rigid unity or morphological kernel (E. Sapir). In other words, both S and O as a topic have free positions in a sentence. In languages of Southeastern part of the Hesperonesian family, in particular, a word order like O-sVo-S occurs, as in Cebuano in the

--	--	--

Southern Philippines, Palauan in Micronesia, for example.

The structure of this “crossover” type was apt to change into a S-O-sVo, as seen in AN₂. This was most likely influenced by a Papuan substratum, without causing any confusion of meaning.

The origin of the postposition also, which occurs with a S-O-V type, can be sought in an anaphoric use of the preposition

* 国立民族学博物館第5研究部

in a sentence-final, such as C-S-V-prep.C (C: complement), as seen in languages of Western Micronesia (*e.g.*, Yapeese, Ulithian *etc.*).

The occurrence of the AN₂ is explicable from external evidence found in neighboring languages near New Guinea, not only from internal reasons, for instance, innovation of causative constructions, as J. Bradshaw thought.

- | | |
|-----------------------|---------------------------------|
| I. はじめに | IV. AN ₂ の語順の特色とその起源 |
| II. パプア諸語の S-O-V 型の特徴 | V. 後置詞の発生とその起源 |
| III. sVo 型のパプア諸語 | VI. おわりに |

I. は じ め に

ニューギニア島およびその周辺の島じまのパプア諸語（あるいは非オーストロネシア諸語）の総数は741と計算され、そのうちの507言語がトランスニューギニア語門(Phylum)に属するとされる（以下、TNG 語門と略）。その分類はもっぱら語彙統計学的方法により、六つの大語門および八つの孤立的言語からなる [WURM 1982: 13]。語彙の相違はけっして小さくなく、これまで比較言語学的な系統および分類研究が行われたのは TNG 語門東ニューギニア高地語系のなかの東部語科 (Eastern Family)、東部・中部語科、西部・中部語科エンガ語亜科のそれぞれ数言語における数十語の比較と再構成が試験的に試みられているにすぎない [WURM 1982: 87]。ただし以下で引用する言語には S. A. Wurm による分類を参考のため語系 (Stock) レベルまで付記する。オーストラリアと陸続きであった数万年前に、アジア大陸からニューギニア島に移り住んだ人びとの長い歴史が、彼らの言語系統を現在では証明不可能なくらいに、大きく変化させてしまったのである。人間の言語における万という単位の年月の経過は、たとえもと同系であった言語間にも重大な相違を引き起こさずにはおかまいといえる。今後ともパプア諸語の比較言語学的研究は困難であろう。しかしパプア諸語にいくつかの共通性も認められ、A. Capell の示す例によれば、冠詞がないこと、名詞には数・格および性ないし類の区別があること、代名詞に単数、複数のほか双数の区別があること（ただし一人称に包括形と排除形の区別は存在しない）、動詞には終止形のほか、中止形（日本語の動詞一テ形に相当）があること、そして語順は主語一目的語一動詞になることなどがある [CAPELL 1969: 35-36]。紀元前30

00年まえころになると、ニューギニア島北部をアジア大陸から出発し東に向かうオーストロネシア民族が通過し、なかには沿岸に定着するものもでてきた。メラネシア地域で先住のパプア族とはげしく混交した様子は形質面、文化面でもみることができるが、言語も大きな影響を被らずにはいなかった。パプア（マライ語 *pěpuah* 「縮れ毛の」に由来する）という名称は形質に関係する。しかしメラネシア地域ではオーストロネシア民族もおしなべて縮れ毛になり、言語の分類名として実際は不適当であるが、本論文においてもパプア諸語という名称を慣用的に用いることにする。オーストロネシア語族のメラネシア語派を特徴づける文法的現象として名詞の範疇化の発達をあげることができるが、この現象の発生はパプア諸語の基層によるものと説明される。そのほかオーストロネシア語族は、ことに西部のヘスペロネシア語派から推定して、元来、主語－動詞－目的語（S-V-O）という語順をもっていたことがわかるが、パプア諸語と接触したオーストロネシア語族のなかには、パプア諸語のような語順をとる言語も現われた。Capell はニューギニア島とその周辺のオーストロネシア語族のうち、S-V-O 型をもつ言語を AN₁、S-O-V 型をもつ言語を AN₂ とよぶ。Capell は当初 [1969]、前者を AN₂、後者を AN₁ とよんでいたが首尾一貫しないが、以下、S-V-O 型を AN₁、S-O-V 型を AN₂ として区別することにする [CAPELL 1971: 242, 1976: 6]。AN₂ は西側には少なく、ジャヤプラ（ヨテファ湾）のトバティ語（Tobati）にはじまって東側へ沿岸ぞいに AN₁ と交錯しながら現われ、南部岬とミルヌ湾では主流となって（例えばバートゥル湾のウェダウ語、Wedau）さらにガルフ湾にまわりこみ、ポートモレスビーのモトゥ語（Motu）から湾の北東部のメケオ語（Mekeo）にいたる。ニューギニアにおけるオーストロネシア民族の長い航海もここで終わっている。AN₂ はまたブーゲンヴィル島南部のウルアヴァ語（Uruava）、トラウ語（Torau）にも見出される [CAPELL 1971: 244]。ニューギニアのオーストロネシア語族は約 100 言語からなるが、AN₁ と AN₂ とでその数をほぼ折半している。本論文の目的は、オーストロネシア系、パプア系諸言語の文中における主語、目的語、動詞の位置関係の比較対照から言語接触の問題を考察しようとするにある。

Ⅱ．パプア諸語の S-O-V 型の特徴

言語接触の結果、語順が変化した例としては古くはシュメール語と接触して S-O-V 型になったアッカド語（セム語系）やインドのシンハリ語（インド・ヨーロッパ語族）がタミル語（ドラヴィダ語系）によって S-O-V 型になった言語があり、新し

くはスリランカのクレオール化したポルトガル語が先住民のタミル語の影響で S-O-V 型になった例などが報告されている [ANDERSEN 1983: 84]。現代のニューギニアでもこれまでにインドネシアのイリアンジャヤ州に普及したインドネシア語や東部高地のウスルファ (Usurufa = ウサルファ Usarufa) 族の使用するトークピシン (Tok Pisin) の語順が AN₂ 型になる傾向が指摘されている [SUHARNO 1981: 13; BEE 1972]。またこれまでほとんど注意されることがないが、オーストロネシア語族の影響を受けて本来の語順を変えたパプア諸語もあったに違いない。数は少ないが、局地的に現われるイリアンジャヤ東北岸のクワンム語 (Kwanem), ニューブリテン島のタウリル語 (Taulil) はそのような言語であると考えられる。それらの言語はいずれもまわりをオーストロネシア語族によって取り囲まれている。またトリチェリ山脈北側に位置し、45言語からなるトリチェリ語門はパプア諸語のなかでも古い層に属するといわれるが、S-V-O 型が比較的多く現われる点で興味深い [WURM 1982: 229]。これは海岸部でオーストロネシア語族と長期にわたる接触をしたためであろう。しかし言語が接触したからといって、かならずしも語順が変わるとはかぎらない。変化するには、そこに基層語のような外的要因が存在することもさることながら、何か特別の言語内の構造的理由があるに違いない。

ところで従来の S-V-O とか S-O-V というような単純化された構造論には、文中の主語は一つである (一つでしかありえない) とするヨーロッパの言語にもとづいた論理が先行し、人類言語の普遍性はそのような論理すなわち文法によってのみ説明できるとする一種の偏見があるため、ヨーロッパの言語以外の言語の記述、分析には、かなり独断が重ねられてきたといえなくもない。オーストロネシア語族の言語では、これまでもっとも研究対象とされることの多かったインドネシア語にたいしてさえ、これをインド・ヨーロッパ語族と同じ主語卓越型に分類し [Li and THOMPSON 1975: 459-489], また S-V-O 型言語扱いをする [STEELE 1978: 585-623] のが一つの典型である。これはインドネシア語の動詞句の内的構造まで考慮しなかったことによる。インドネシア語は主語・主題卓越型であり S-V-O のみならず、T-S-V あるいは S-V-T (T は主題、日本語の「は」に相当) を頻出させる言語である [崎山 1982: 68-83]。そしてパプア諸語の場合も、単に S-O-V 型と考えてよいのは、ガルフ湾中央部のトアリピ語 (Toaripi), オロコロ語 (Orokolo) のような少数派である。トアリピ語の場合は後置詞 (日本語の助詞に相当) の使いわけによって T-S-V 型も可能である。

トアリピ語 (TNG 語門エレマ語系) の例：

ave ita la paeai.

[*ave* (dog)-*ita* (pig)-*la* (object marker)-*paeai* (kill: present simple, past indefinite)]

「イヌはブタを殺した」

ita ave sa paeai.

[*sa* (subject marker)]

「ブタはイヌが殺した」

あとの例の *ita* は、實際上、T であるにもかかわらず、従来の分析で通常は O にされる。もう一つケワ語 (Kewa, TNG 語門東ニューギニア高地語系) からの例を掲げる。

ââ-mé répena póâ-a.

[*ââ* (man)-*mé* (agent)-*répena* (tree)-*póâ* (cut)-*a* (3 sg: past)]

「男が木を切った」

ââ-re yaina ómâ-a.

[*ââ-re* (topic marker)-*yaina* (sick)-*ómâ* (do)-*a*]

「男は病気だ」

ada râ-a.

[*ada* (house)-*râ* (burn)-*a*]

「それが家を燃やした=家は燃えた」

パプア諸語のほとんど大部分はこのような主題型に属するといえる。パプア諸語の主題型は、動詞が文の中枢部となって主語、目的語の機能をはたす代名詞接辞 (bound person markers) をともなうという特徴をもつ。主語接辞はテンスやアスペクトの機能を同時に帯びることもある。文中の名詞や独立的代名詞は、接辞によって反復されることによりその機能が明示されるから、場面、文脈からいちいち言及する必要のない場合、名詞や独立的代名詞を欠いた動詞句だけでも文法的に完結した文となりうる。その一例としてつぎのケワ語の例では、独立的代名詞の *né* をいわずとも文法的に成り立つ。

(*né-mé*) *irikai tâ-wa.*

[*né* (1 sg)-*mé-irikai* (dog)-*tâ* (hit)-*wa* (1 sg: past)]

「私がイヌをぶった」

このように位置の固定した接辞をふくむ動詞句は、それ自身で ‘rigid’ な内部構造をもち、いって安定した語順というとき、この動詞句内のいわば「辞順」にこそそれが

現われるともいえる。Wurm のようにパプア諸語の S-O-V を ‘rigid’ というのはただしくない [Wurm 1982: 64]。語史的にももっとも安定している部分という意味で、動詞句は E. Sapir のいう morphological kernel に相当する [Sapir 1921: 206]。パプア諸語に関して従来からいわれてきた S, O は、むしろ心理的主語、心理的目的語にあたるものであって、文法的に規定しうる要素ではない。S, O に関するかぎり、文中での位置にはより頻繁に現われる型があるとはいうものの、原則的には自由である。そして主題は論理学の命題とは違い、かならずしも文の先頭に立つわけではない。S, O は文のどこにでも現われることができるし、事実、現われるのである [Paul 1920: 127]。

オロ語 (Olo, トリッチェリ語門ワペイ・パレイ語系) の例でいえば、

ki këlofol le.

[*ki* (1 sg: subject)-*k* (1 sg: subject)-*ëlof* (stand waiting)-*ol* (3 masc sg: object)-*le* (3 masc sg: subject)]

「私は彼を待っている」

のように主語代名詞の *le* が目的語接尾辞 *ol* を強調するためとはいえ、文末で繰り返されている。

本論文では小文字の *s, o* を、それぞれ、主語接辞、目的語接辞を表わすために、また大文字の *S, O* も従来どおり使用するが、*S* と *s*、*O* と *o* とが照応する文において、便宜的に *S* を第一主語 (*O* を第一目的語)、*s* を第二主語 (*o* を第二目的語) とよぶことも可能であろう。この第二目的語は間接目的語または受益格 (benefactive) と同じ概念でないことはいうまでもない。このような構文は二重主語文とよんでもよい。

パプア諸語に現われる動詞句のタイプはつぎのようになる。ただしテンスやアスペクトを表わす形態素の位置ならびに共通部分の S-O は省略する。また間接目的語あるいは受益格を接辞によって動詞句中に反復する言語があるので、受益格を *b* で表わすことにする。

1. Vs 型
- 2-1. Vso 型
- 2-2. Vsb 型
3. Vos 型
4. Vbs 型
- 5-1. oVs 型

- 5-2. bVs 型
- 6-1. sV 型
- 6-2. soV 型
- 6-3. sVb 型

かならずしも多いデータからの推論ではないが、大体の傾向として動詞句中の *s, o* は *so* または *os* という順序で並び、また *V* によって *s, o* が分断される場合でも、その順序は *os* になることが指摘できるであろう。*sVo* はパプア諸語の本来の語順ではないということである。また *osV* も理論的には考えるけれども例はみあたらない。なおパプア諸語では *Vos* の例も少ないといわれる [CAPELL 1969: 98]。ただし、この動詞句内の構造に関するかぎりでは、一般に *VOS, OSV, OVS* 型はきわめてまれか少ないという普遍性 [GREENBERG 1963: 76] は、*OSV* を除いて再検討されなければならない。*S-O-V* 型には *O-S-V* 型も同時に現われやすいことが指摘される [STEELE 1978: 600]。しかしこの場合の文頭に立ちやすい *O* は、むしろ *T* と解釈すべきことが多い。本論文で区別したような、文法的レベルでの *osV* と混同してはならない。そのほか *Vo* あるいは *oV* も考えられるが、この型は予想されるように命令形にはならない。命令法は特別の人称接辞によるか（エンガ語）、命令の小辞によって表現される（サルトユイ語）のが普通である。例えば、

エンガ語 (Enga, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例：

na-a.

[*na* (eat)-*a* (2 sg: immediate imperative)]

「すぐ食べよ」

na-pe.

[*pe* (2 sg: late imperative)]

「後で食べよ」

サルトユイ語 (Salt-Yui, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例：

nekia.

[*ne* (eat)-*ki* (negative)-*a* (imperative)]

「食べるな」

ようになる。以下で動詞句の類型に基づきながら論述する。

1 型

Vs は目的語を *o* によって反復しない型であるが、この型そのものは自動詞文にも

現われる。

ナシオイ語 (Nasioi, 東パプア語門東ブーゲンビル語系) の例:

nin nanamaun.

[*nin* (1 sg)-*nan* (go)-*a* (1 sg)-*maun* (present)]

「私は行く」

daq nanimaun.

[*daq* (2 sg)-*nan-i* (2 sg)-*maun*]

「君は行く」

S-O-V 型に由来する1型を保持するのはケワ語, ワフギ語, コボン語, ワスキア語, オロカイヴァ語, ナシオイ語, サルトユイ語などである。

ワフギ語 (Wahgi, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例:

elim mokine nonum.

[*elim* (3 sg)-*mokine* (food)-*no* (*nol*: eat)-*n* (verb class)- ϕ (completive, continuative)-*um* (3 sg)]

「彼は食事をしている」

コボン語 (Kobon, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例:

kaj ap nying-a.

[*kaj* (pig)-*ap* (some)-*nying* (eat)-*a* (3 sg: remote past)]

「彼は豚肉を少し食べた」

ワスキア語 (Waskia, TNG 語門イスマルド語系) の例:

buruk ke patete naso.

[*buruk* (pig)-*ke* (subject marker)-*patete* (potato)-*na* (eat)-*so* (3 sg: realis)]

「ブタがサツマイモを食べている」

オロカイヴァ語 (Orokaiva, TNG 語門ビナンデレ語系) の例:

(*dago*) *amo kogara.*

[*dago* (1 excl pl)-*amo* (3 sg)-*kog* (see)-*a* (mid past)-*r* (1 pl, 3 pl)-*a* (indicative)]

「我々は彼を見た」

ナシオイ語の例:

(*nine*) *baden oaman.*

[*nin* (1 sg)-*e* (actor marker)-*baden* (bird)-*o* (see)-*a* (1 sg)-*man* (present)]

「私は鳥を見ている」

2-1 型・2-2 型

センタニ語 (Sentani, TNG 語門センタニ語系) の 2-1 型の例:

habanale.

[*hab* (*habē*, hit)-*a* (1 sg: subject: actual)-*n* (3 sg: object)-*a* (glide)-*le* (indicative)]

「私は彼をぶった」

センタニ語の 2-2 型については 374 頁参照。

3 型

ディムガ語 (Dimuga = ダガ語 Daga, TNG 語門中部・南東部語系) の例 [CAPELL 1969: 98-99]:

(*ne*) *jawagep.*

[*ne* (1 sg)-*jaw* (see)-*a* (?) -*ge* (2 sg: object)-*p* (1 sg: subject: actual?)]

「私は君に会う」

さきに述べたように 2 型, 3 型は少数派と考えられる。またウマナカイナ語 (Umanakaina, TNG 語門中部・南東部語系) では動詞の種類によって 3 型と 5-1 型の両方が使い分けられるが [CAPELL 1969: 99], めずらしい例であろう。

4 型

受益格にのみ接辞が反復される言語としてエンガ語 (Enga, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例:

akâli dokómé menâ dóko piâ.

[*akâli* (man)-*dóko* (determiner)-*me* (agent)-*menâ* (pig)-*p* (*pyaó*, hit)-*i* (past)-*a* (3 sg)]

「男はブタをぶった」にたいする,

akâli dokómé menâ dóko nambanyâ/émbanya pyakeâ.

[*nambâ* (1 sg)-*nya* (benefactive)/*émba* (2 sg)-*pya* (hit)-*k* (-*ka*-, inclusive of the speaker or hearer)-*e* (past)-*a*]

「男は私／君のためにブタをぶった (殺した)」

そのほかカウゲル語 (Kaugel = ガウイグル語 Gawigl, TNG 語門東ニューギニア高地語系), ミアンミン語 (Mianmin, TNG 語門中部・南ニューギニア語系), セレペット語 (Selepet, TNG 語門フィニスタール・フォン語系) などともこの型に属する。

ただし3型と4型との間には、5-1型と5-2型との間に存在するような相関性は認められない。

シロイ語 (Siroi, TNG 語門ライ沿岸語系) では動詞が五つの類にわかれ、その類によって1型、3型、5-1型が現われるほか、4型も可能である。

シロイ語の例:

sine mbo sayokeg.

[*sine* (1 pl)–*mbo* (pig)–*sayok* (hunt)–*eg* (1 pl: present)]

「我々はブタを狩る」

は1型であるが、

nu kingo kame nunge rirong pasa saning it.

[*nu* (3 sg)–*kingo* (child)–*kame* (plural marker)–*nunge* (3 sg: possessive)–*rirong* (warning)–*pasa* (talk)–*sa* (say)–*ning* (3 pl: object)–*it* (3 sg: present)]

「彼は彼の子等に注意する」

では4型になる。

5-1型・5-2型

この型はパプア諸語でもっとも一般的で、かつ分布も広い。

ダニ語 (Grand Valley Dani, TNG 語門ダニ・クエルバ語系) の例:

(*an*) *wathi.*

[*an* (1 sg)–*w* (3 sg: object)–*at* (hit)–*h* (near past)–*i* (1 sg: subject)]

「私は彼をぶった」

wam wo'nethe.

[*wam* (pig)–*wo'* (*wan*, take)–*n* (1 sg: object)–*et* (dative)–*h*–*e* (3 sg: subject)]

「彼は私にブタをくれた」

ダニ語の場合、間接目的語をふくむとき、うえの例のように与格のマーカ― (*et*) によって明示されるから、厳密な意味での5-2型に属するとはいえないが、5-1型の言語では直接目的語と受益格が一つの文に現われるとき、受益格が優先されて5-2型で表わされるのが一般的な傾向である。この傾向は、オセアニアではミクロネシアの諸言語をはじめとして、世界の多くの言語に普遍的に認められる [Grvón 1975: 161–164]。

ヤガリア語 (Yagaria, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例:

pabegidue.

[*pa* (3 pl: object)–*begi* (hit)–*d* (past)–*u* (1 sg: subject)–*e* (indicative)]

「私は彼等をぶった」

bade yuvaka dote'na pamidune.

[*bade* (boy)-*yuva* (group)-*ka* (2 sg: possessive)-*dote'na* (food)-*p* (3 pl: object)-*ami* (give)-*d-un* (1 pl: subject)-*e*]

「我々は君の息子たちに食べものを与えた」

ガドスブ語 (Gadsup, TNG 語門東ニューギニア高地語系) の例:

àdèqú.

[*à* (3 sg: object)-*dèq* (hit)-*ú* (1 sg: subject)]

「私は彼をぶった」

(*tèñĩ*) *iyàmi bààntá àmèqú.*

[*tèñĩ* (1 sg)-*iyàmi* (dog)-*bààntá* (man)-*à-mèq* (give)-*ú*]

「私は男にイヌを与えた」

このように5-1型と5-2型との間には相関関係がありこの二型はセットをなすと考えることができる。フォレ語 (Fore, TNG 語門東ニューギニア高地語系), テレフォル語 (Telefol, TNG 語門中部・南ニューギニア語系) などともこの原則に従う。つぎにクオット語 (Kuot = パナラス語 Panaras, 東パプア語門ニューブリテン語系) の例を体系的に示す。

aximatumg kulot.

[*kulot* (boy)]

「私は少年を見た」

oximatumg kulamut.

「私は少女を見た」

ただし *la* (topic marker) を用いて, *kulot la aximatumg.* ということもできる。

目的語接頭辞として *tu-, bi-, bu-; nu-, me-, mi-* がそれぞれ, 一人称単数・双数・複数, 二人称単数・双数・複数を表わす。三人称の双数と複数には男性・女性名詞にたいする接頭辞の区別はない。

leximatumg kulen.

[*kulen* (two boys, a boy and a girl)]

「私は二人の少年／少年一人と少女一人を見た」

leximatumg lobie.

[*lobie* (two girls)]

「私は少女二人を見た」

maximatumg lop

[*lop* (children)]

「私は子供たちを見た」

表1 独立的代名詞

	sg	dl	pl
1	tuto	bibi	bubuo
2	nuno	měme	mimi
3	itie (m) utic (f)	litie	mitie

表2 動詞「見る」の動詞句

		object			
		masculine sg		feminine sg	
		perfect	imperfect	perfect	imperfect
subject	sg	1 aximatung	aximatang	1 oximatung	oximatang
		2 aximanung	aximanang	2 oximanung	oximanang
		3 aximaong (m) aximaieng (f)	aximaang //	3 oximaong (m) oximaieng (f)	oximaang //
	dl	1 aximaing	//	1 oximaing	//
		2 aximamang	//	2 oximamang	//
		3 aximaliong	//	2 oximaliong	//
	pl	1 aximavang	//	1 oximavang	//
		2 aximaming	//	2 oximaming	//
		3 aximameng	//	3 oximameng	//

クオット語の動詞には二つの類があり、うえの例のように5-1型となる類のほか、sVo になる類がある。その類別の根拠は現在では明らかでない。表3では *li* 「植える」を中心に過去の主語接頭辞と目的語接尾辞（男性名詞）のついた動詞句を示す。三人称単数の主語接頭辞の *i-* は男性名詞、*u-* は女性名詞を代表する。女性名詞の目的語をうける場合は *-o* をとる。 *tulia*.

表3 動詞「植える」の動詞句

	sg	dl	pl
1	tu-li-a	bi-li-a	bu-li-a
2	nu-li-a	mě-li-a	mi-li-a
3	i-li-a(m) u-li-a(f)	li-li-a	me-li-a

「私はそれ（例えば、バナナ *uduma*）を植えた」、以下同様。

またクオット語では受益格を *o* でうけないから5-2型は現われない。

tuala abuluma aun mixana.

[*tu* (1 sg: subject: past)–*ala* (give)–*abuluma* (fish)–*aun* (3 sg: object)–*mixana* (man)]

「私は男に魚を与えた」

ただしこの例のように独立代名詞 *aun* (男性名詞), または *un* (女性名詞), *liun* (双数), *maun* (複数) で反復されるのを特色とする。

6-1型・6-2型・6-3型

この型は自動詞文にも現われることができる。

キワイ語 (Kiwai, TNG 語門トランスフライ語系) の例:

(*mo*) *nigo siawa ainarao.*

[*mo* (1 sg)–*nigo* (2 pl)–*siawa* (between)–*ai* (present)–*n* (1st person: all tenses)–*arao* (walk)]

「私は君たちの間を歩く」

ヴァルマン語 (Valman, トリチェリ語門ワペイ・パレイ語系) の例: [CAPELL 1969: 104–106]:

(*kum*) *moro.*

[*kum* (1 sg)–*m* (1 sg)–*oro* (go: aorist)]

「私は行く」

オロ語の例:

(*ki*) *kaule.*

[*ki* (1 sg)–*k* (1 sg: subject)–*aula* (come)]

「私は来る」

スコ語 (スコ語門レベル語系) の例:

(*né*) *ha.*

[*né* (1 sg)–*h* (1 sg: subject)–*a* (go)]

「私は行く」

他動詞文に由来する6-1型はスコ語にだけ現われる。

スコ語の例:

hé né hvé.

[*hé* (3 masc sg)–*né* (1 sg)–*h* (3 masc sg: subject)–*vé* (see)]

「彼は私を見る (見た)」

ただし特定の動詞は目的語接辞を抱合的にふくみ、一見きわめて不規則な形を呈する。これが動詞句の本来の形態であったと考えられる。現在、パプア諸語のなかでスコ語は単音節の声調言語である点が特異である。6-1型の他動詞文が現われるのは、類型的な孤立語に近づきつつある傾向と無関係ではない。表4で動詞「打つ」にたいする主語と目的語との相関を示す。ただし複数の二人称・三人称形(イタリックの部分)は動詞に目的語として抱合されないから、独立の代名詞を目的語としてとる必要がある。

表4 「打つ」の動詞句

		object								
		sg						pl		
		1	2	3 (m)	(f)			1	2	3
subject	sg	1	—	hùng	ha	láng		ling	yí	yí
		2	mle	—	ba	mláng		mling	sí	sí
		3 (m)	hle	hùng	ha	hláng		hling	hyí	hyí
		(f)	nφ	nùng	pa	náng		ning	sí	sí
	pl	1	—	nù	da	náng		ning	ní	ní
		2	le	—	ha	láng		ling	yí	yí
		3	nye	nyùng	ta	nyáng		ning	sí	sí

6-1型のある言語には6-2型、6-3型も存在する。6-2型として、

キワイ語の例：

gi merero (nou) sio gopia.

[*gi* (that)-*merero* (child)-*nou* (3 sg)-*sio* (dog)-*g* (2nd or 3rd person: past)-*o* (sg: object)-*pia* (kill)]

「その子供は(彼は)一匹のイヌを殺した」

キワイ語の場合、*o* は目的語の数を示すにすぎないから、厳密な意味で目的語接辞とはいえないかもしれない。単数にたいする *o* は複数のとき *i* となるが、双数では *i* と接尾辞 *-ama*、三数では *i* と接尾辞 *-bi* という組み合わせによって表わされる。なお *-ama*、*-bi* は数詞「二」「三」とは関係ない。

neigo neito giratoroamarumo.

[*neigo* (3 pl)-*neito* (3 dl)-*g-i* (pl: object)-*ratoro* (ask a question)-*ama* (dl: object)-*rumo* (pl: agent)]

「彼等は彼等二人にたずねた」

またこの例のように複数の主語は接尾辞によって再度、繰り返されるから、主語および目的語が単数でないとき、動詞句の構造は實際上、soVos のような形をしている。

オロ語の例：

le lorsi nafle.

[*le* (3 masc sg)-*l* (3 masc sg: subject)-*ol* (3 masc sg: object)-*rsi* (shoot)-*nafle* (bird)]

「彼は鳥を射る」

例文では **lolrsi* が並列同化によって *lorsi* となっている。

ヴァルマン語では直接目的語は6-2型で、受益格は6-3型で表現される [CAPELL 1969: 105]。

yancami.

[*y* (3 pl: subject)-*an* (3 masc sg: object)-*cam*i (bury)]

「彼等は彼を埋める」

yanaren.

[*y-anare* (say: past?)-*n* (3 masc sg: object)]

「彼等は彼に云った」

nanarei.

[*n* (3 masc sg: subject)-*anare-i* (3 pl: object)]

「彼は彼等に云った」

6型は全体としてパプア諸語のなかで少数派である。ちなみに TNG 語門マダン・アデルベルト山脈語亜門、ラム語亜門にもまったく出現しない [Z'GRAGGEN 1971]。

Ⅲ. sVo 型のパプア諸語

この形をもつパプア諸語は非常に少ないが、それでも例がないわけではない。その一つとしてニューブリテン島ガゼル半島のタウリル語は、構造的にもパプア語としてきわめて特異な言語である。

タウリル語（東パプア語門ニューブリテン語系）の例：

amu atotingan.

[*amu* (3 masc sg)-*a* (3 sg: future)-*toti* (ton, see)-*ngan* (1 sg)]

「彼は私を見るだろう」

(*ngan*) *ngatuk ngin na belia.*

[*ngan-nga* (1 sg: subject: present)-*tuk* (give)-*ngin* (2 sg)-*na* (with)-*belia* (boar)]

「私は君に一匹の雄ブタを（＝雄ブタで）与える」

この文例では、動詞のうしろに代名詞 (*ngin*) が間接目的語として用いられ、意味的に直接目的語の名詞は手段の前置詞 (*na*) をともなっている。これは英語の *furnish someone with something* に似た表現である。タウリル語は S-V-O 型になったために後置詞を失い、前置詞を発生させた。この言語は真北に位置するオーストロネシア語族のトーライ族から文化的、言語的に強い影響を受けつづけ、現在、推定される話し手は数百人、そしてその数はますます減少しつつある。

イリアンジャヤのサルミ地方沿岸のクッネム語（＝クwesten 語 *Kwesten*, TNG 語門ツール・プレイン湖語系）も厳密な意味での代名詞接辞とはいえないが、sVo 型をとる。この言語も沖合の島じまのオーストロネシア語族ソバイ諸語と深い交渉があった。

クッネム語の例：

ankwan deima kwransa dakartar.

[*ankwan* (man)-*dei* (that)-*ma* (emphasis)-*kwan* (dog)-*sa* (object marker: past)-(*da*) (3 sg: subject)-*dakar* (hit)-*ta* (masc sg: object)-*r* (remote past)]

「その男は一匹の雄イヌをぶった」

win deima kwransa dakarur.

[*win* (woman)-*dei-ma-kwan-sa-(da)-dakar-u* (fem sg: object)-*r* (remote past)]

「その女は一匹の雌イヌをぶった」

主語接頭辞は三人称の場合、単数、双数、三数、複数でそれぞれ、*da-*, *kadar-*, *kakit-*, *kan(a)-* となるが、うへの文例では動詞 *dakar* と語頭音の重複をさせている。目的語接尾辞は人称に関係なく、単数、双数、三数／複数でそれぞれ、*-ta-* (男性) / *-u-* (女性), *-so-*, *-tabi-* となる。なおこの言語にはテンス・アスペクトの区分が微妙に発達している。

以上、例示したようにパプア諸語に独自の動詞句の型は原則的に六つに分類できるが、多数派は oVs 型であること、またオーストロネシア語族との深い接触により sVo 型が発生する可能性もあることをみた。

IV. AN₂ の語順の特色とその起源

AN₂ はニューギニア地域の S-O-V 型をもつオーストロネシア語族に与えられた名称であった。しかしすでに述べてきたように、その動詞句の構造には本質的な相違がある。つまり sVo 型をとるということである。一つの文のなかで s は S と、o は O と照応 (copy agreement) する。ただしオーストロネシア語族のすべてが、そのような照応型構造をもつわけではない。AN₂ を考えるまえに、西寄りのオーストロネシア語族、インドネシアやフィリピンのヘスペロネシア語派の場合をみよう。

インドネシア語 (Indonesian) の例：

Dia mēmukul orang itu.

[*dia* (3 sg)-*mě* (transitive)-*mukul* (*pukul*, hit)-*orang* (man)-*itu* (that)]

「彼はその人をぶつ (ぶった)」

Orang itu dia pukul.

「その人は彼がぶつ (ぶった)」

Orang itu dipukul.

[*di* (3 sg, passive marker)]

「その人は (誰かに) ぶたれる (ぶたれた)」

Orang itu dipukulnya.

[*nya* (3 sg: oblique)]

「その人は彼にぶたれる (ぶたれた)」

この例からもわかるように、動詞には S, O の反復がない。ただし *Dia pukul.*, *Dipukul.*, *Dipukulnya.* という発話も場面や文脈により可能なのは、一見、目的語のようにみえる語 (*orang itu*) が主題扱いにされ、ゆえに動詞は他動詞化の接頭辞 (*mě-*) をつける必要がないのである。したがって最初の例文は S-V-O, それ以下の例文は T-S-V (または T-sV) のような型をしていることがわかる。接頭辞 *di-* (その機能はフランス語の *on*, ドイツ語の *man* に等しい) は語史的に三人称代名詞 *dia* に由来している。

ピリピノ語の場合は、インドネシア語と異なって主題を明示するマーカーが備わっており、また動詞も主題と呼応して、いわば活用するような洗練された文法的特徴をもつ。

ピリピノ語 (Pilipino=タガログ語 Tagalog) の例：

Bumuntal siya ng taong iyan.

[*buntal* (hit)–*um* (infix: actor focus: perfect)–*siya* (3 sg: topic)–*ng* (oblique marker)–*tao* (man)–*ng* (ligature)–*iyang* (that, near the listener)]

「彼はその人をぶった」

Binuntalniya ang taong iyan.

[*buntal*–*in* (infix: object focus: perfect)–*niya* (3 sg: oblique)–*ang* (topic marker)–*tao*–*ng*–*iyang*]

「その人は彼がぶった」

一つの文中で主題は一度しか現われることができないという制限と関連して、例文中の *-niya* (インドネシア語の *-nya* と対応) には、日本語の「の」の主格的用法と共通する点がある。

しかしフィリピン南部のセブアノ語 (Cebuano) には通常の一つだけの主題のほかに、M. Shibatani によれば「二次的主題化」(secondary topicalization) という現象がある [SHIBATANI 1985]。

Si Maria nahigugmaniya si Juan.

[*si* (topic marker)–*Maria*–*na* (actor focus: imperfect)–*higugma* (love)–*niya* (3 sg: oblique)–*si*–*Juan*]

「マリアを、ジョンは彼女を愛している」

この文で二つの主題、*Maria* と *Juan* はそれぞれ、*-niya* と *na-* に照応し、文型としては図1のような構造をしていることがわかる。

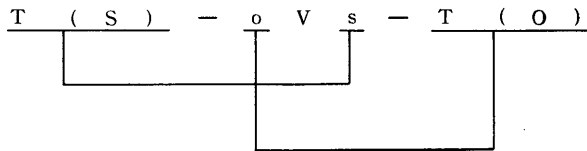


図1

線で示したようにこの構造を今後、「交差型」(crossover type) とよぶことにする。つぎに、

Si Juan gihigugma niya si Maria.

[*gi* (object focus: perfect)]

「ジョンは、彼はマリアを愛している」

この目的語重点文 (object focus) の例では *Juan*, *Maria* はそれぞれ、*-niya*, 完了

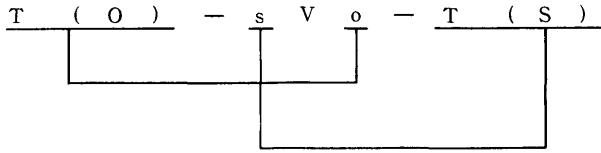


図 2

の接頭辞 *gi-* で反復されているから、構造的には図 2 のようになる。この構造は、たまたまパプア語的な型になるが、未完了 (imperfect), 意図 (contemplated) ではそれぞれ *-in-*, *-on* という接中辞, 接尾辞が用いられるから、動詞句は Vos のようになる。この動詞句にはフィリピンの諸言語に多い V-O-S の雛型が現われている点が興味深い。このような交差型構造をもつ文が、ニューギニアに近いヘスペロネシア語派の南東部の言語にも現われるのは、AN₂ を考えるうえできわめて暗示的である。

フィリピン南部は東側でミクロネシアにつながり、またニューギニアの北側にあたる。そして西部ミクロネシアのヘスペロネシア語派パラウ語 (Palauan) にも交差型の文が現われる。

A ngikel a longa er ngii a ngálek.

[*a* (phrase marker)-*ngikel* (fish)-*a-lo* (3 sg, pl: hypothetical)-*nga* (*mengáng*, eat: imperfect)-*er* (specific object marker)-*ngii* (3 sg: emphatic)-*a-ngálek* (child)]

「魚は、子供が（彼が）それを食べた」

A ngálek a ksilebekii.

[*a-ngálek-k* (*ku*, 1 sg: hypothetical)-*sebek* (*mesébek*, kick)-*il* (perfect marker)-*ii* (3 sg: object)]

「子供は、私が彼を蹴った」

パラオ語でいわゆる受動形に相当するのがうえの文である。ただしこの交差型文には仮定形のための代名詞が用いられるが、その理由はわからない。

交差型文においては、動詞句に文としての基本的情報が凝縮されているから、文中のその他の要素の位置の占めかたには、自由さがある。つまり共時的にも通時的にも意味的混乱を引き起こすことなく、語順を変えることが可能である。かつて南部フィリピン、西部ミクロネシア、北部ニューギニア付近を通過中のオーストロネシア語族に存在した交差型表現法は、さらに東漸したメラネシア語派ではその語派に特徴的な S-sVo-O 型として定着し、文中では *s* にあたる、名詞の主語と述語を結合するための一般に *i* または *e* という三人称代名詞に由来する小辞を発達させた。いっぽうでパ

プア諸語と接触した言語のなかには、容易にパプア語型の語順に移行して S-O-sVo 型、すなわち AN₂ となることができたのである。つぎにトバティ語から始まってメケオ語にいたる AN₂ の例を示す。

最初にトバティ語の例を体系的に示す。

表5 独立の代名詞

	sg	dl	tl	pl
1	nex	nternnyos (in) nininnyos (ex)	nterxator (in) ninixator (ex)	nter (in) nini (ex)
2	nte	ntērinyos	ntēričxator	ntērič
3	nti	ntērinnyos	ntērixator	ntēri

表6 代名詞の目的語接尾辞

	sg	dl, tl, pl
1	-rox	-ten, -teno (in) -ni, -nino (ex)
2	-xo	-rič
3	-i	-rič

表7 動詞 ton「見る」の人称変化

	sg	dl, tl, pl
1	ndom	těndom (in) ndom (ex)
2	ndom	rěndom
3	ndom	rěndom

(nte) (ntērinnyosit) ndomrič.

「君は彼等二人を見る（見た）」

ニューギニアのオーストロネシア語族にたいするパプア諸語の基層的影響を強調する H. K. J. Cowan によれば [COWAN 1965: 220], トバティ語の

intia tēmi ni for nexut yanrox.

[*intia* (=nti)-*tēmi* (father)-*ni* (of)-*for* (pig)-*nex-ut* (to)-*y* (3 sg: subject)-*an* (give)-*rox*]

「彼は私に父のブタをくれた」

という文は、トバティ語と隣接するパプア語系センタニ語の、

něye něko le obo dadē ikwǎdē.

[*něye* (3 sg)-*ně* (3 sg: possessive)-*ko* (ako, father)-*le* (de, of)-*obo* (pig)-*da* (1 sg)-*dē* (to)-*ik* (ikēlē, hold)-*w* (3 sg: subject: actual)-*dē* (1 sg: object)]

「彼は私に彼の父のブタをくれた」

という文(2-2型)と構文上敷きうつしになっているという。たしかに語順全体は平行し、間接目的語が目的語接尾辞として優先されるという点も共通するが、動詞句内の構造は依然として異なる。むしろこの点こそが重要なのである。

ウェダウ語の例：

oroto natuna i inanai.

[*oroto* (man)–*natu* (child)–*na* (3 sg: genitive)–*i* (3 sg)–*inana* (see)–*i* (3 sg: object)]

「男は子供を見る」

ヒリモトゥ語の例：

Taube iena natuna ia itaia.

[*tau* (man)–*be* (topic marker)–*iena* (3 sg: possessive)–*natu* (child)–*na* (3 sg, pl: genitive)–*ia* (3 sg)–*ita* (see)–*ia* (3 sg)]

「男は彼の子供を見る（見た）」

Taube idiedia natuna idia itaidia.

[*tau-be-idiedia* (3 pl: possessive)–*natu-na-idia* (3 pl)–*ita-idia*]

「男たちは彼等の子供たちを見る（見た）」

メケオ語（イナワブイ方言）の例：

lau oi kuku lapengio.

[*lau* (1 sg)–*oi* (2 sg)–*kuku* (tobacco)–*la* (1 sg: subject)–*pengi* (give)–*o* (2 sg: object)]

「私は君にタバコを与える」

このようにすべての例は S–O–sVo 型をみせるが、ヒリモトゥ語 (Hiri Motu) というならば、名詞が主語のときは主語—目的語—動詞、代名詞が主語のときは目的語—主語—動詞という語順になり、構文上に重大な変化が生じるかのように説明されることがある。[DUTTON and VOORHOEVE 1974: 21]。これはやはり文中の主語を一つと解釈したための混乱である。代名詞が主語になる例として、

Iabe iena natuna ia itaia.

「彼は彼の子供を見た」

の文頭の *iabe* 「彼は(主題)」は通常の文ではあまり現われないということにすぎない。この文の構造は (S)–O–sVo となり、基本形であることになんら変りはない。

V. 後置詞の発生とその起源

S–O–V 型言語は後置詞 (postposition) をもつことを特徴とする。[GREENBERG 1963: 79]。パプア諸語にも一般的に後置詞の種類は多い。しかし AN₂ の言語に後

置詞の数が少ないのは、S-O-V型が二次的に発生したと無関係ではない。AN₂では通常、一つの後置詞が同時に多くの機能を帯びる。ヒリモトゥ語の例で示すと、*dekena(i)* が「に、で、から、と、…」(英語では on, in, at, to, from, along, with, for, by) を表現する。

Magani lau gwadaia io dekenai.

[*magani* (wallaby)-*lau* (1 sg)-*gwada* (pierce)-*ia* (3 sg: object)-*io* (spear)-*dekenai* (with)]

「私はワラビーを槍で突いた」

なお文中で *dekenai* を従えた句の位置には自由さがあり、

Io dekenai magani lau gwadaia.

ということもできる。ヒリモトゥ語の母体となったモトゥ語ではうえの例のような手段を表わす *dekenai* の用法はなく、

Io magani na gwadalaia.

[*io-magani-na* (1 sg: subject: simple present and past)-*gwada-laia* (verbal suffix denoting the instrument)]

「槍、それで私はワラビーを突いた」

といわなければならない [WURM 1964: 32]。ニューギニアで第二のピジン化した言語として、ヒリモトゥ語には *dekenai* の機能の拡大化がみられるわけである。

dekenai はモトゥ語の *deke* 「近く、側」にオーストロネシア語族に共通の、三人称接尾辞 *-na* と場所の指示詞 *i* がついてできた派生語であることは明らかであって、たとえ文全体の語順が後置詞を要求するようになったとはいえ、本来、前置詞的な語が後置詞の機能を帯びはじめるについては、やはりニューギニアの周辺のオーストロネシア語族に見出される特殊な表現法に、その由来を求めることができる。

ヒリモトゥ語 (モトゥ語) ではかつて、**io magani lau gwadalaia (gwadaia dekenai* といえた時期があったのではなかろうか。*dekenai* には前出の語、句をうけて「それに依拠して、それによって」という意味をもったと考えられる。うえの文は「槍、それによって私はワラビーを突いた」ということで、その根拠を以下に述べる。ミクロネシアの西部から中部にかけてヤップ語 (Yapese)、トラック語系のウリシー語 (Ulithian)、クサイエ語 (Kusaiean) などには、文中における「前方照応的」(anaphoric) な前置詞句表現がみられる。

ヤップ語の例：

(U) *Maap' ea ku guub.*

[*u* (from)-*Maap'* (place name)-*ea* (noun phrase connector)-*ku* (*ka-*, past)-*gu* (1 sg)-*ub* (come)]

「マップ島から私は来た」(文頭で *u* はしばしば落とされる)

という強調文(この場合、地名)において、通常は文全体をさらに整えるため前置詞句 *riy* (前置詞 *roo-*「の、で、から」と指示詞 *i* からなる)を文末に置いて文頭の語を繰り返す、

Maap' ea ku guub riy.

「マップ島、そこから私は来た」

という言いかたが行われる。ウリシー語では *yiiyang* 「何か、ある、それ」という文末に置かれる照応専用の代名詞がある。

ウリシー語の例：

Eap melee yi bwe le lox yiiyang.

[*Eap* (Yap Island)-*melee* (focus marker)-*yi* (1 sg)-*bwe* (future)-*le* (definite)-*lox* (go)-*yiiyang* (there)]

「ヤップ島、そこへ私はもう行くだろう」

クサイエ語の例：

El muhta lohм sikh ah.

[*el* (3 sg)-*muhta* (stay)-*lohм* (house)-*sikh* (*se-*, classifier for land and shelter)-*k* (1 sg: possessive)-*ah* (determiner)]

「彼は私の家に住んでいる」

という通常の文は、「家」が強調されて文頭にでると、

Lohм sikh ah el muhta we.

「私の家、彼はそこに住んでいる」

のように副詞 *we* 「そこ」が文末で反復されなければならない。

うえのミクロネシアの諸言語の例からわかることは、言語的材料に若干の違いはあっても、各言語に前方照応という共通の表現形式がみられるということである。しかし言語的材料から判断すると、西部に古い形式が残るといえるであろう。ミクロネシアでは、現在、例えば **ku guub Maap' riy* (ヤップ語) のような言いかたは許されないけれども、主題として文中における位置は、本来、自由なはずである。

フィリピン南部を通過したオーストロネシア語族には前方照応表現があり、それが現在、ミクロネシアの諸言語に残るいっぽうで、ニューギニアに定着して語順を改めはじめたオーストロネシア語族にも後置詞の発生を促す下地となったということがで

きる。ミクロネシアとニューギニアとの間に見出される共通の文化項目についてこれまでほとんど問題にされたことはないが、本論文で明らかにしたような言語的事実は、その一つとして加えることができる。

Ⅵ. お わ り に

パプア諸語相互間の相違の激しさと沿岸部ではオーストロネシア語族との深い混合によって、パプア諸語のなかには語彙統計学的な分類さえ困難な、いまだ所属の曖昧な孤立的言語が8言語に達している。ただし全体的にみても、資料が十分にある言語はごく僅かだから、今後、資料の増加とともに分類上の位置が改められ、あるいは所属が明らかになる言語もでてくるであろう。そのような孤立的とされている言語の一つ、パプアニューギニアのネルソン半島の付け根で東西に分断され、約2000人の話し手がいるマイシン語 (Maisin) をここで取り上げる。この言語はこれまで混合語と見なされ、オーストロネシア語化したパプア語ともパプア語化したオーストロネシア語ともいわれている。マイシン語の動詞句はつぎのようになる。

tamateng tarang kaseng itarawusi.

[*tamati* (man)-*eng* (instrumental)-*taru* (dog)-*ang* (3 sg: possessive)-*ka* (tree)-*eng-i* (3 sg: subject)-*tarawu* (hit)-*si* (3 sg: object)]

「男は(男によって)彼のイヌを棒でぶった」

J. Lynch は、動詞句における形態素の順序が *sVo* であることに注目し、マイシン語はオーストロネシア語族の一員と見たのは卓見であった [LYNCH 1977]。ただしタウリル語、クッネム語でも見たように、動詞句の構造もけって外からの影響に難攻不落というわけではない。言語の系統的帰属の最終的判定は言語体系全体から行われなければならないとするならば、マイシン語における多様な後置詞の存在が依然としてこの言語をオーストロネシア語族にふくめるための障壁となることも事実である。

J. Bradshaw の博士論文は、オーストロネシア語族における AN_2 の発生の原因を考察したものである [BRADSHAW 1982]。彼は、ニューギニアのオーストロネシア語族からいくつかの言語をモデルとして選び、使役表現をもつ言語 (VO 言語) と複合動詞をもつ言語 (OV 言語) とを比較することによって、前者から後者へと変化したという過程を考える。例えば、

ギトゥア語 (Gitua) :

tirap ijgaya mate.

[*ti* (3 pl)-*rap* (hit)-*ijgaya* (pig)-*mate* (3 sg: die)]

「彼等はブタをぶって、ブタは死んだ=彼等はブタを殺した」

のような S-V-O-V 型は、AN₂ の

カイリル語 (Kairiru) :

bur rruni amyat.

[*bur* (pig)-*rro* (3 pl)-*un* (hit)-*i* (3 sg)-*a* (3 sg)-*myat* (die)]

の S-O-V-V 型を経て、AN₂ の

ゲダゲド語 (Gedaged) :

boz dupunufuni.

[*boz* (pig)-*du* (3 pl)-*punu* (shoot)-*fun* (kill)-*i* (3 sg)]

の S-O-VV 型が得られるとする。

彼が考えるように、OV をすべて複合動詞から導くというのは困難であろう。例えば単純な「打つ」という動詞は、どのようにして OV 型となるのであろうか。要するに、AN₂ の発生をパプア諸語からの基層的影響とみるよりもオーストロネシア語族の内部構造に起因すると考えているようであるが、他の文化領域全般にわたる交流から推定しても、深刻な言語接触とそれに基づく言語的誘発を軽視することはできないと思われる。さらに、なぜニューギニア近郊でのみ S-O-V 型が発生したかの説明をしなければならない。

本論文は、ニューギニアにおけるオーストロネシア語族に発生した語順変化の原因を、これまでの Cowan, Capell, A. Pawley [PAWLEY 1973: 118] らの、パプア諸語との接触によって発生したという単なる説明から一歩ふみこんで、言語の内部構造と表現の両側面から考察したことになる。

言語接触によって起こった事象は語順変化以外にも、オーストロネシア語族メラネシア語派を特徴づける名詞の範疇化がパプア諸語の基層的影響によるとする見方は一般に認められているし、オーストロネシア語族に普遍的な一人称複数における包括形と排除形の区別は、パプア諸語のなかでこれを獲得した言語もあれば (例えば北ハルマヘラ諸語、センタニ語、ワスキア語、オロカイヴァ語、トアリビ語)、一方でオーストロネシア語族のなかには、例えばアドミラルティ諸島のアワ語 (Awa)、ブーゲンヴィル島のウルアヴァ語やトラウ語はこの区別を失った。借用語をふくめそのような言語事実を各言語ごとにいちいち列挙してゆけば、切りがないであろう。

最後に、本論文で考察した言語接触による語順変化の問題は、どこまでオセアニア地域に特殊な現象なのか、そして言語類型変化の一般論としても、今後さらに検討し

てみる価値がある。

謝 辞

本論文で使用した言語資料は、筆者のフィールドワークで収集したものと文献によるものとにわけられる。

クッネム語、トバティ語は昭和57年度文部省海外学術調査研究補助金（課題番号：57041060）による調査の成果の一部であり、タウリル語、クォット語、ヒリモトゥ語、ウェダウ語、メケオ語（イナワブイ方言）は昭和60年度、国際交流基金からパプアニューギニア大学客員教官として派遣された際に調査採集したものである。またミクロネシアのパラウ語、ヤップ語、ウリシー語、クサイエ語は昭和53、55、60年に行った現地調査の結果に基づくが、ウリシー語以外は現行の正書法で表記している。

文献による言語名とその資料は以下に掲げるとおりである。

なお、本論文は第91回日本言語学会大会および本館の共同研究「オセアニアの民族文化における個性と普遍性の民族学的研究」（代表者牛島巖併任助教授）で発表した内容を骨子とする。貴重なコメントをくださった方がたと原稿を読んで有益な助言をよせられた本館の長野泰彦、須藤健一両助教授に感謝したい。また東京大学助教授土田滋氏は Bradshaw 論文を教唆しそのコピーを貸与された。記してお礼をもうしあげる。

文 献

〔一 般〕

(PL=*Pacific Linguistics*)

ANDERSEN, P. K.

1983 *Word Order Typology and Comparative Constructions*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.

BEE, D.

1972 Phonological Interference between Usarufa and Pidgin English. *Kivung* 5(2): 69-95.

BRADSHAW, J.

1982 *Word Order Change in Papua New Guinea Austronesian Languages*. Unpublished Dissertation Paper, University of Hawaii.

CAPELL, A.

1969 *A Study of New Guinea Languages*. Sydney University Press.

1971 The Austronesian Languages of Australian New Guinea. In T. A. Sebeok (ed.), *Current Trends in Linguistics* 8, The Hague/Paris: Mouton, pp. 240-340.

1976 General Picture of Austronesian Languages, New Guinea Area. In S. A. Wurm (ed.), *New Guinea Area Languages and Language Study* 2. PL C-39: 5-51.

COWAN, H. K. J.

1965 Discussion and Criticism on Melanesian and the Origin of Austronesian. *Current Anthropology* 6(2): 217-226.

DUTTON, T. E. and C. L. VOORHOEVE

1974 *Beginning Hiri Motu*. PL D-24.

GIVÓN, T.

1975 Topic, Pronoun, and Grammatical Agreement. In C. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, New York: Academic Press, pp. 151-188.

GREENBERG, J. H.

1963 Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful

- Elements. In J. H. Greenberg (ed.), *Universals of Language*, The M. I. T. Press, pp. 73-113.
- LI, C. N. and S. A. THOMPSON
1975 Subject and Topic, a New Typology of Language. In C. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, New York: Academic Press, pp. 459-489.
- LYNCH, J.
1977 *Notes on Maisin, an Austronesian Language of the Northern Province of Papua New Guinea?* Preliminary Draft.
- PAUL, H.
1920 *Prinzipien der Sprachgeschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- PAWLEY, A.
1973 Some Problems in Proto-Oceanic Grammar. *Oceanic Linguistics* 12(1-2): 103-188.
- 崎山 理
1982 「インドネシア語の文の基本的構成」森岡健二他編『講座日本語学10 外国語との対照 I』明治書院, pp. 68-83.
- SAPIR, E.
1921 *Language*. New York: Harcourt, Brace and Co.
- SHIBATANI, M.
1985 *Cebuano Grammatical Structure*. Handout.
- STEELE, S.
1978 Word Order Variation: A Typological Study. In J. H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Language 4*, Stanford University Press, pp. 585-623.
- SUHARNO, I.
1981 *The Reductive System of an Indonesian Dialect, a Study of Irian Jaya Case*. Ms.
- WURM, S. A.
1964 Motu and Police Motu, a Study in Typological Contrasts. *PL A-4*: 19-41.
1982 *Papuan Languages of Oceania*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Z'GRAGGEN, J. A.
1971 *Classificatory and Typological Studies in Languages of the Madang District*. *PL C-19*.
- 〔個別言語〕
(*PNGL*=*Papers in New Guinea Linguistics*, *PL*=*Pacific Linguistics*)
- ダニ語:
BROMLEY, H. M.
1981 *A Grammar of Lower Grand Valley Dani*. *PL C-63*.
- エンガ語:
1973 *Enga Dictionary*. *PL C-20*.
- フォレ語:
SCOTT, G.
1978 *The Fore Language of Papua New Guinea*. *PL B-47*.
- ガドスブ語:
FRANTZ, C. and H. McKAUGHAN
1973 Gadsup Independent Verb Affixes. In H. McKaughan (ed.), *The Languages of the Eastern Family of the East New Guinea Highland Stock*, University of Washington Press, pp. 439-449.
- カウゲル語:
BRUCE, L. and R. BLOWERS
1970 Kaugel Verb Morphology. (*PNGL* 12) *PL A-25*: 37-60.
- ケワ語:
FRANKLIN, K. J.
1971 *A Grammar of Kewa, New Guinea*. *PL C-16*.
- キワイ語:
RAY, S. H.

- 1932 *A Grammar of the Kiwai Language, Fly Delta, Papua*. Port Moresby: Government Printer.
- コボン語：
DAVIES, H. J.
1981 The Syntax of the Simple Sentence in Kobon. (*PNGL* 21) *PL* A-61: 1-70.
- マイシン語：
STRONG, W. M.
1911 The Maisin Language. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 41: 381-396.
- ミアンミン語：
SMITH, J.
1977 Mianmin Sentence Structure. *Work Papers in Papua New Guinea Languages* 22: 5-53.
- ナシオイ語：
HURD, C. and P. HURD
1966 *Nasioi Language Course*. Port Moresby: Dept. of Information and Extension Services.
- オロ語：
McGREGOR, D. E. and A. R. F. McGREGOR
1982 *Olo Language Materials*. *PL* D-42.
- オロカイヴァ語：
HEALEY, A., et al.
1969 Preliminary Notes on Orokaiva Grammar. (*PNGL* 9) *PL* A-18: 33-64.
- サルトユイ語：
IRWIN, B.
1974 *Salt-Yui Grammar*. *PL* B-35.
- セレベット語：
McELHANON, K. A.
1972 *Selepet Grammar Part 1: From Root to Phrase*. *PL* B-21.
- センタニ語：
COWAN, H. K. J.
1965 *Grammar of the Sentani Language*. *Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde* 47.
- シロイ語：
WELLS, M. A.
1979 *Siroi Grammar*. *PL* B-51.
- スコ語 (ワロモ方言)：
ROSS, M.
1980 Some Elements of Vanimo, a New Guinea Tone Language. (*PNGL* 20) *PL* A-56: 77-109.
- テレフォル語：
HEALEY, P. M.
1965 *Telefol Clause Structure*. (*PNGL* 3) *PL* A-5.
- トアリビ語：
BROWN, H. A.
1968 *A Dictionary of Toaripi*. *The Oceania Linguistic Monographs* 11.
- ワスキア語：
ROSS, M. and J. N. PAOL
1978 *A Waskia Grammar Sketch and Vocabulary*. *PL* B-56.
- ワフギ語：
PHILLIPS, D. J.
1976 *Wahgi Phonology and Morphology*. *PL* B-36.
- ヤガリア語：
RENCK, G. L.
1975 *A Grammar of Yagaria*. *PL* B-40.